

Our Life 125号

- * 内容 *
- 静岡県社協ふれあい基金助成事業「共創社会実現研究会」で子どもを育む議論活発……………p.1
 - 「256名の子どもたちに聞きました ホットとする地域ですか」調査報告まとまる……………p.2
 - 「調査結果」から浮き彫りになった10の提言とは……………p.3
 - 第3回公開型研修会は、1月11日に「円卓トーク」で「子どもを育む地域」を語り合う……………p.4
 - いよいよ、第30回学会全国大会名古屋で11月30日開催……………p.4

静岡県社協ふれあい基金助成事業「共創社会実現研究会」 で「子どもを育む福祉コミュニティ」で大いに議論

「静岡福祉文化を考える会」は、令和元年度・静岡県社会福祉協議会ふれあい基金地域福祉・ボランティア活動等活動推進助成事業により、「子どもの福祉文化を創る（子どもの地域孤立化防止と仕組みづくり）—子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみのささえあいの仕組みづくり—」の活動に取り組んでいる。活動の柱立ては、「調査研究活動」「公開型研修会」「共創社会実現研究会の設置による議論」である。「共創社会実現研究会」は、本会会員と子ども支援に取り組む県内実践活動者、コミュニティ（自治会）領域等から委員をお願いし、子どもたちが住み慣れた地域社会で安心して暮らし合える望ましい地域環境について、広く意見を求め、これからの地域づくりへの提言を目的に、9月14日に第1回、10月26日に第2回を、それぞれ静岡県総合社会福祉会館を会場に開催した。

協議内容は、研究会の位置づけと方向性・地域の現状課題、子ども対象調査実施結果を考察、子どもを地域で育む地域づくりの提言等を基に、議論を重ねている。

これまで、2回の研究会から、「地域全体よりも、とかく、自分の地域のことが心配である」「市民の地域との関わりが崩壊している。学区の運動会に参加する人が少ない」「子ども達とお年寄りが一緒になるように地域の概念をどう持っていくか」「世代間交流 ふれあい交流による楽しくふれあう仕掛けの取り組みの必要性」「お祭りに子どもたちが積極的に関わっていくことが大事 実体験、良き伝統を熱い思いで伝えていく そのために、大人社会の意識改革が急務」「地域の行事は、子どもたちの主体性を尊重することが重要で、大人は見守ると子どもは盛り上げる」「合宿、親の仕事の関係で出られない子が多い 親の事情が関係 習い事による親との関係」「子ども主体の行事でないと、衰退していく 伝統文化伝統行事や遊びを大切にしたい」「地域に入りづらい 若い世代がどう地域参加の機会をもつかが課題」等

の意見が寄せられた。こうした議論から「キーワード」として、(1)地域の概念、(2)世代間交流、(3)楽しいを創造する地域の仕組み、(4)実体験、(5)大人社会と子ども社会の関係、(6)伝統行事の維持（お祭り）、(7)若者の地域参加、(8)あそび。次回、第3回研究会は、2020年1月11日（土）開催。



256名の子どもたちに聞きました ホットする地域ですか 【子ども対象調査実施初めて これまで最高調査回収率 98.5%】

本会は、2018年度から2年間「子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみのささえあいの仕組みづくり」を活動テーマに取り組んできた。本会結成以来、23年間、「現場実践検証」「拓かれた地域総合型学習」「地域課題把握のための調査研究活動」の3つの柱立による福祉文化実践活動に取り組んできた。そのうちの一つ、「調査研究活動」においては、これまで、ほとんど、大人を中心に、意識と実態の調査に取り組んできた経緯がある。活動全般にもいえることであるが、これまで、大人社会から、いかに地域ぐるみで子どもを育むことができるかを議論し課題提起をしてきた。

今回は、「子ども」をキーワードにした、事業展開であることから、地域社会で暮らし合う子ども自身からの声を拾い上げ、事業検証をしようと、初めての試みとして、「子ども」主体の意識と実態調査により、子どもを取り巻く状況を把握し、大人社会への問題提起を考察することをねらいとして取り組んだ。

地域社会における、「子ども」を対象に、「基本属性」「生活状況」「家族・家庭」「地域社会」「自由意見」の5つの項目をもとに、23の設問項目を作成した。そして、回答結果を、子どもを地域で育む地域環境改善はいかにあるべきか地域総合的な課題解決にむけた提言の一助とすることとした。そのため、事業の準備段階において、十分な検討の期間を費やした。調査票の作成検討及び予備調査作業においては、対象児童及び保護者の協力をいただき、調査票の内容、問いかけ等について、県内各地から意見を求めた。

調査票の設問には、漢字すべてに読み仮名をふること、専門的な福祉領域の用語表現は、回答する児童が混乱することがないように配慮をすること、調査協力員（大人社会）が子どもたちと向き合う環境の中で調査活動にあたることに心掛ける等、調査の実施にあたっての確認事項をより明確にしていくことに心掛けた。

調査実施時期については、調査の目的に沿って、あくまでも、「地域社会において、子どもをいかに育むか」を目的に取り組むため、子どもの集団的環境や、学校教育に頼ることなく、8月の夏休み期間中に、関係機関・団体、会員、実践者等にその趣旨を理解していただき、子どもたちに調査の趣旨を個別に説明し、個別的調査環境に努めた。本会における調査研究活動は、結成当初から今日まで、23年間、手づくりによる、市民主体の取り組みをし、今日につなげている。今回の調査も、県内東部・中部・西部の各地域に均等化した取り組みに心掛け、各地域の協力のもと実施した。その結果、これまでにない、ほぼバランスの取れた回答結果である。

依頼先件数では、会員（35%の回収）、社会福祉協議会（108%）、地域実践者（128%）施設（100%）、企業（100%）、自治会関連（100%）と43か所依頼に対して、33か所（回収77%）の協力を得た。

回答回収枚数は、調査の趣旨に賛同していただき、特に地域実践者は、積極的に、調査票をコピーして、領域内の対象の子どもたちに協力を呼び掛け回答していただいている。その結果、260枚のうち256枚で98.5%と、この24年間の調査研究活動では、回収率は一番高い状況となった。当初、「100名」の回収を目標に、調査タイトルを「100名の子どもたちに聞きました ホットする地域ですか」として取り組んだが、回収予想をはるかに上回る256名（回収率98.5%）の回答をいただいたことから、調査タイトルを改め、「256名に聞きました ホットする地域ですか」の表題としてまとめることとした。本調査考察にあたっては、「全体傾向」「男女別傾向」に加えて、「学年別発達段階」による意識と実態の傾向をまとめることとして、高学年をさらに「4年生」「5年生」「6年生」の各学年ごとの考察を加えることとした。今日の家族構成の大きな変化が、子どもを取り巻く地域環境にどのような変化をもたらしているかの一面も捉える努力をした。

考察は、単に子どもたちの意見内容を列挙することなく、子どもたちが回答していただいた意見を大人社会は、その実現や改善にどのように取り組むべきか、今年度の本題につなげる努力をした。

No.	調査依頼先	依頼箇所数	依頼枚数	回収箇所数	回収枚数	パーセンテージ
1	会員	20	40	7	44	17
2	社会福祉協議会	12	130	13	121	47
3	地域実践者	7	60	9	52	20
4	施設	1	10	1	19	8
5	企業	1	10	1	10	4
6	自治会組織関係	2	10	2	10	4
	計	43	260	33	256	100

子どもを対象とした調査結果から浮き彫りになった15の提言とは

本会では、24年間の「福祉文化実践調査研究活動」で、今回初めて「子ども対象」の調査を実施した。

「256名の子どもから聞きました ホッとする地域ですか」の調査は、主題事業である『子どもを育む福祉コミュニティの再構築と地域ぐるみの支えあいの仕組みづくり』に対して、子ども自身（小学校高学年256名）から回答していただいた。この尊い意見を、これからの地域づくりに活かす目的で取り組んだ。

調査は、大きく「基本属性の関すること」「子どもの生活状況に関すること」「子どもの家庭・家族に関すること」「子どもの地域社会に関すること」「自由提言」の5つの項目をもとに実施。

ここでは、子どもを育む地域づくりに、子どもから大人社会に呼び掛けていることを提言としてまとめた。

1. 大人社会は、子どもの地域環境を単に整備するだけにとどまらず、地域ぐるみの子どもたちの居場所として、有効に地域資源が活用できるように子どもたちに働きかける工夫がみつようであること。
そして、積極的に子ども同士が自由に交流しあうとともに、さらには、世代を超えた楽しい地域づくりにつなげる工夫が求められる。
2. 子どもの成長と共に、特に、男性に対する、より積極的な家族・家庭における子どもと大人社会とのコミュニケーション力の向上と場の提供努力が求められること。
3. 子ども、特に男性や成長と共に「家事労働（手伝い）」の機会を改めて考え、積極的な子どもの「地域参加」につなげていく大人社会の工夫が必要である。
4. 生活の中で、つねに子ども、特に男性に向き合う環境に配慮し、地域社会の仕組みを大人社会が伝授し、常に相談（受容）出来る環境維持に心掛けることが必要である。
5. 地域社会で支えあい暮らし合う仕組みを、大人社会が子ども社会に方向づける環境を心掛ける。
6. 子どもなりに、「他人のために何かしてあげたい」という意識があることを大人社会が真剣に受け止め（受容）、地域社会において、実践・体験の機会を提供できるように努力する必要がある。
7. いかにして、親自身が子どもに対して、家庭生活の中で、否定的な生活環境（規制・制約）ではなく肯定的な生活環境（促進・期待・奨励・称賛）の機会を多く持ち、維持しながら、その延長上において、子どもたちが積極的に、身近な地域社会の中で、地域参加活動することにより自信が芽生えてくるプロセスを重視することが大切である。
8. 子どもを育む原点は「家庭」にある、その楽しい家庭環境維持に努める。
特に、男性の存在をさらに受け入れる工夫が求められる。
9. 家族そろった食事等、家族内のコミュニケーションが維持され、さらに身近な地域社会の話題性に広げ、家庭と地域社会（大人社会）をつなげる環境保持に努める。
10. 大人社会（親）の近所づきあいが、子どもの生活状況に大きく影響している。
今日、現状として、子どもの成長と共に、身近なご近所とは疎遠となり、地域参加の機会を失う傾向にある。日常生活圏において、家族ぐるみで地域をつなぐ大人の役割が発揮できるように努力する。
11. 大人社会が、身近な地域の魅力を伝え、地域行事の参加を子どもに積極的に呼び掛ける。
12. 子ども、特に男性には、日々の日常生活の中で、発達段階におけるごく身近な生活環境の中で、ご近所における大人社会からほめる積極的なコミュニケーションの配慮に心掛ける努力が必要である。
13. 子どもたちが望む地域行事の多くは「お祭り」である。
子どもたちの熱い願いは、大人社会に、地域の行事を維持しまた生み出す力を問い質している。
季節感、地域の自然・地域性や、伝統歴史のある行事を通じて、地域住民との交流を期待する行事等は、子供たちに対する単なる思いだけではなく、地域の良さをいつまでも抱き、子どもたちが大人社会に加わった時に、さらにこうした地域の絆を継承していく取組みが求められる。
また、自由な地域環境を求め、子どもたちの意見・アイデアを反映する地域づくりが問われる。
14. いかにか、地縁組織と志縁組織の協働により実現できるかの工夫。
15. 子どもたちは、地域住民同士が心通いあえる地域を望んでいる。
「人的環境・語れる環境」を大人社会が創造する上で、コミュニケーション力を深め、身近な関係をもつ大人社会の努力。
「ご近所」「笑顔」「楽しい」「あいさつ」「笑顔」「優しさ」等の言葉が回答に多く含まれている。
今からでも、子どもを育む地域づくりの第一歩として取り組める提言でもある。

いよいよ、第30回学会大会全国大会東海大会&第1回中部東海ブロック大会が11月30日 12月1日愛知県名古屋市・中京大学名古屋キャンパスで開催！本会は、3つの実践発表予定

中部東海ブロック（愛知県・静岡県・三重県・岐阜県・長野県）において、17年ぶりに「第30回日本福祉文化学会全国大会東海大会&第1回中部東海ブロック大会」がいよいよ、あと14日後に愛知県名古屋市の中京大学名古屋キャンパスで開催。平成時代の幕引きとともに、新元号“令和”の下、住民主体の地域社会再構築の必要性から、新しい福祉文化の風を吹き込む意味で、「福祉文化元年」と位置づけ、とりわけ、これから求められる人材養成のあり方や音楽、アクティビティなど、多世代の豊かな暮らしを創造するアートを考える機会になることを切願している。

今回の大会には、本会から実行委員会委員として4名参画してきたが、諸般の事情で、十分その役割を果たせず当日を迎える。大会2日目の「実践発表」では、本会会員が、下記の内容を発表予定。

1. 「子どもを育む地域づくり その意識と実態検証－『静岡発 福祉文化の創造』24年間の調査研究活動のプロセスから－」
発表者：河野 恵介氏
2. 「専門性と市民性の融合による地域のネットワークを探る」
発表者：望月 隆仁氏
3. 「地域包括ケアシステムへの理解と共感に向けての－取り組み－
“若者発 ご近所福祉かるた”で地域づくりを！！」
発表者：望月 句子氏

大会1日目の「全体シンポジウム：福祉の原点を探る～3つの実践例を通して～」では、高齢者、障がい者、児童の各領域の実践事例をもとに展開するが、高齢者実践事例：「地方発 福祉文化の創造で“ご近所福祉”を拓く」を主題に「静岡福祉文化を考える会」のこの24年間の取り組みを紹介。

◆ 第3回公開型研修会（2020年1月11日@県総合福祉会館 1F 103会議室）は、「円卓トーク」で「子どもを育む地域」を語り合う を開催します。多数の参加を期待します。

事務局日誌拝見（08月17日～11月16日）

- 08/17 ▶ 第30回日本福祉文化学会全国大会東海大会第3回事務局会議開催
- 09/01 ▶ 「Our Life 124号」発行配布作業
- 09/14 ▶ 「第1回共創社会実現研究会」開催
- 09/25 ▶ 子ども対象調査最終回収数：256枚（回収率98.5%）
- 10/19 ▶ 第7回焼津福祉文化共創研究会開催
- 10/26 ▶ 「第2回共創社会実現研究会」開催 学会大会実践発表に関する打ち合わせ実施
- 10/28 ▶ 焼津福祉文化共創研究会・コミュニティ活動集団現地訪問受け入れ
- 11/02 ▶ 学会大会第4回実行委員会開催
- 11/16 ▶ 第200回委員会開催 第18回静岡県福祉文化研究セミナー開催
▶ 第7回焼津福祉文化共創研究会開催 「Our Life 125号」発行配布作業
- 11/30 ▶ 第30回日本福祉文化学会全国大会東海大会開催（@愛知県名古屋市）

●福祉文化実践活動をご一緒にしませんか？

「静岡福祉文化を考える会」は、阪神淡路大震災(1995)翌年度の1996年9月1日に発足し、2019年度に24年の節目を迎えました。本会の活動基調は、「専門性と市民性の融合」「地域総合学習の企画と実践」「課題解決に向けたプロセス重視」のもと、「公開型研修会開催」「調査研究活動」「現場実践研修活動」を展開しています。さまざまな分野で活動している会員が、身近に感じている地域社会全般の課題解決に向けて市民の視点で活動をしています。

「静岡発 福祉文化の創造」の活動を定着化してまいります。

- ◇ 会費：社会人3,000円 大学生以下1,000円
- ◇ 問い合わせ：〒424-0841 静岡市清水区追分3-5-17
Tel.: 054-367-2878 Fax.: 054-367-2884

編集後記

猛暑続きから一転、朝晩は16度と少々肌寒さを感じる季節を迎えた。令和元年もあと2ヶ月で終わる時期。いよいよ2020年東京五輪の年。本会は、25年目の節目を迎える。あと5か月間で、静岡県社会福祉協議会ふれあい基金助成事業を総括し、「子どもを地域で育む地域づくり」に関する、総括活動に取組み、地域社会に対して、今こそ、「地方発・足元発 福祉文化の創造」の視点で、課題提起をしっかりとしていきたいものである。会員の地域の生活・活動状況の寄稿を期待しています。